

## 「すさび」「すさぶ」考―源氏物語の表現1

中川 正美

## 一 解釈の分かれる「すさぶ」

① をかしかりつる人の名残恋しく、ひとり笑みしつつか臥したまへり。

日高う大殿籠り起きて、文やりたまふに、書くべきことばも例ならねば、筆うち置きつつすさびぬたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。  
(源氏物語、若紫二四七)<sup>〔注〕</sup>

これは光源氏が若紫に文を書いているところである。霰が吹り荒れた昨夜、源氏は若紫の手を捉え、少女が奥に引き入ろうとするのに乗じて御簾にすべり入り、御帳台で寄り添って一夜を過ごし、夜深く出て、可憐な姿を思い起こしながら横になったのである。「ひとり笑み」からはその満足感、達成感が伝わってくる。そうして、日も高くなって起き出し、文を遣らうと書き始めたのだが、記しているのは「ことば」で「こととは」ではないから、和歌ではなく文章である。昨夜は何事もなかったのだから、「例ならねば」というように、通常の後朝とはいえない。だからこそ帰邸してすぐに贈らず、一眠りした後で、それも散文を若紫にもわかりやすくと筆をうち置きうち置きしながらしたためているのである。ところが、続く「すさびぬたまへり」の解釈が分かれている。『源氏物語評釈』（角川書店、一九六五年一月）では「すさぶ」を「遊ぶ意」と注して「愚図ついでいらつしやる」と訳し、『新潮日本古典集成』（新潮社、一九七六年六月。以下『集成』と記す）では「気の向くままにしておられる」と傍書きしている。ところが、『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九四年三月。以下『新編』と記す）では、「この『すさび』は、心がすすんで熱中する意」と注し、「熱心に」と訳している。心の

動くままに記すという前提は同じながら、愚図つくと熱中するのとでは逆である。これをどう考えればいいのか。

実は新古今集でも、「すさぶ」は、同時代の詠者の作にもかかわらず、逆といってよい解釈がなされている。

② 窓近き竹の葉すさぶ風の音にいとど短きうたたねの夢

(新古今・夏・二五六・式子内親王)

③ 松に這ふまさの葉葛散りにけり外山の秋は風吹きすさぶらん

(新古今・秋下・五三八・西行)

④ 思ひかねうち寝る宵もありなまし吹きだにすさべ庭の松風

(新古今・恋四・一三〇四・良経)

いずれも葉に吹く風を「すさぶ」と詠んでいるが、③の西行の歌は「葉葛散りにけり」といっているから「すさぶ」は荒れる意で、この解釈はずっと変わらない。一方、室町以降の歌論書では、②の「すさぶ」は「荒れる」、④の「吹きすさぶ」は、「吹き止む」と解されているが、現在ではともに吹く勢いが弱る意と考えるようになってい<sup>〔注〕</sup>る。それは、竹の葉に吹く風の音で「うたたね」の夢が破られたと詠み、あの方の訪れを待つ苦しさ<sup>〔注〕</sup>に耐えかねてつい眠ってしまう私をやすらかにまどろませてほしいと願う歌意にそぐわないと考えられたからだが、②の解釈に「慰み興ずる意で五三八とは別」（『新日本古典文学大系』一九九二年一月）、「吹いてもてあそんでいる。『荒く吹く』という解があるが、従えない」（『新編』一九九五年五月）と、ことさらに激しく吹く意を打ち消すのは烈風でも成り立つからで、それを葉に戯れるように吹く微風とするのは、式子内親王に「短夜の窓の呉竹うちなびきほのかに通ふうたた寝の

秋」と、相似た状況を「ほのかに通ふ」と詠む歌があるからだろう。

とはいえ、同じ時代で、同じ語が対立する意で用いられていることに変わりはない。これについて山口佳紀氏は『小学館古語大辞典』（一九八三年一二月）「すさむ」の項で、

「すさぶ」ともい、マ行音・バ行音の交替例の一つであるが、「すさぶ」の方が古い形のものである。同一箇所が伝本によって、マ行になったりバ行になったりしていることも少なくない。ただし、「すさむ」には上二段がなく、「すさぶ」には下二段がないのは注意すべきである。なお、この語は、一（四段活用）の①と③、三（下二段活用）の①と②のように正反対の意味を持つので語積上問題になることが多い。たとえば、「風吹きすさむ」は風が激しく吹く場合と、風がやむ場合と両方を表す。このように正反対の意を持つに到った事情は、十分明らかでない。しかし、この語は、本来自然の勢いに任せて…するの意だったらしい。自然の勢いに任せるといふことは、一方では高揚・熱心の方に、他方では荒廃・粗略の方向につながるようになるから、両義への分化は考えられないことではない。

と、説いておられる。括弧内は筆者が補った。

山口氏は自然を主体とする例で説明されているが、しかしながら、平安散文に自然の例は認められない。むしろ、人間を主体とする用例ばかりなのである。『新撰字鏡』に「樂溢、須佐比」、『名義抄』に「怠荒荒逸 スサヒ スサヒタリ」と、ほしいままに楽しむ、勢いに任せて進む、心の向くままに逸脱するとあるから、主体が自然なら「勢いの赴くままに…する」意、人間なら「心の赴くままに…する」意となつて、積極的に消極的にも解しえよう。

では、①の源氏物語若紫巻の場合はどうか。ここは源氏が心のままに

過ごしている状態で、それを気まぐれなさまとも、見方を変えれば、熱中しているさまとも捉えられる。源氏物語にもう一例認められる「すさびる」は、

⑤君は大殿におはしけるに、例の、女君、とみにも対面したまはず。

ものむつかしくおぼえたまひて、あづまをすが搔きて、「常陸には田をこそつくれ」といふ歌を、声はいとなまめきて、すさびるたまへり。

（若紫二五一）

と、葵上のいつもながらの冷たい対応におもしろからぬ源氏が、和琴を心やりに軽く弾きながら、風俗歌常陸を声だけは艶めいて、葵上にあてこすつて謡う姿を「すさびる」と表現している。正格とは異なる「すが搔く奏法と気まぐれな謡いようで、源氏の懽然とした想いを描出しているのである。①の若紫巻の場合も、「筆うち置きつつ」書いている状態を「すさびる」といつているのだから、熱中ではなく、若紫の「をかしき」姿を思い出し思い出ししながら、気の向くままに筆を継いでいく文書きと考えられる。

このように、解釈は文脈の流れをいかに読み取るか、場面を、作品をどう考えるかによって左右される。本稿では、他の語や他作品も視野に入れて解釈を考えていき、「すさぶ」の語義をより細やかに探っていくことで、源氏物語の表現のありよう、その意図を考究していきたい。

## 二 平安仮名文における「すさぶ」語彙

「すさび」「すさみ」「すさぶ」「すさむ」など、複合語も含めて「すさぶ」語彙と考えると、平安仮名文では「すさぶ」語彙はつぎのように認められる。表1は韻文、表2は散文作品で、作中和歌も含めている。ただ、すべての語を表示していない。上二段活用の「すさぶ」は四段活用の「すさぶ」に、バ行とマ行の交替と考えられるマ行の複合動詞や複

合名詞などはバ行に含め、敬語は通常の語に含めて<sup>（注）</sup>いる。

表1には八代集に万葉集も加えて「すさぶ」語彙の現れ方を示した。

詞花集はともかく、千載集に認められないのは意外だが、「すさぶ」語彙は散見する程度にしか用いられていない。興味深いのは、万葉集には上二段活用の自動詞「咲きすさぶ」が一例だけ見え、古今集から金葉集までは下二段活用の他動詞「すさむ」ばかりで、新古今集になると四段活用の「すさぶ」ばかりになっていることである。

これはバ行とマ行の交替とは異なる。四段活用の「すさむ」が「すさぶ」の変化した語と考えられているのは、万葉集に、

朝露に咲きすさびたる(咲酢左乾垂)月草の日くたつなへに消ぬべく  
思ほゆ (一〇・二二八二)

とバ行の「咲きすさび」が認められ、「酢左乾」と表記されており、古今六帖でも、

ある時はありのすさびに語らばで恋しきものと別れてぞ知る  
(古今六帖二八〇五)

と、名詞「すさび」が認められるからだ、ただ、万葉集の主体は月草で、新古今集の四段活用は三例とも風である。したがって、新古今時代から、和歌に自然物が主体の「すさぶ」が詠まれるようになったためと

表1

	すさむ 下二段	すさび	手 すさび	すさぶ	咲き すさぶ	吹き すさぶ
万葉集					1	
古今集	2					
後撰集	2					
拾遺集	1					
後拾遺集	1					
金葉集	1	2	1			
詞花集						
千載集						
新古今集		2	1	2		1

も考えられる。というのは、平安仮名文の「すさぶ」は、これら以外はすべて人間や動物が主体の、意志的な行為に用いられているからである。  
散文作品ではどうか。  
表2で知られるように、「す

さぶ」語彙は大和物語に一例、平中物語に四例、蜻蛉日記に一例、うつほ物語に三例、和泉式部日記に一例、枕草子に四例と意外に少ない。竹取物語・伊勢物語・落窪物語・更級日記には認められもしない。そんななかで、源氏物語では突出して多く、紫式部日記では一例にすぎないのに、八八例も認められる。後追の後期物語でも浜松中納言物語は四例、夜の寝覚は三例でしかない。狭衣物語だけが三例と、作品の長さを考えれば、源氏物語と同じ程度認められるが、その用い方はずっと単純である。  
また、この表では語を行為ごとにまとめて示している。散文作品の「すさぶ」はすべて人間の行為だからで、「すさび」から「すさび暮らす」までは、碁や双六、物語、食事、演

表2

	すさむ 下二段	すさび	心の すさび	すさび ごと	すさび わざ	すさび 歩き	すさび ある	すさび 暮らす	すさび 臥す	掻き すさむ	参り すさぶ	口ず ささぶ	言ひ すさぶ	謡ひ すさぶ	吹き すさぶ	弾き すさぶ	手す ささぶ	すさび 書く	すさび 散らす	書き すさぶ
大和物語													1							
平中物語													4							
蜻蛉日記	1																			
うつほ物語	1	1			1															
和泉式部日記				1																
枕草子										1	1	2								
源氏物語	3	12	11	9	2	8	2	1		1	8	9	4	3	2	3	1	1	10	
紫式部日記												1								
浜松中納言			1									1							2	
夜の寝覚			1			2														
狭衣物語		3	1			2			1		3	8			1	2	4		7	

奏、描画、懸想など種々の行為を表す、総合性を有する語、「搔きすさむ」は火鉢の灰を火箸で搔き均し、「参りすさぶ」は体を揉む手技動作、「口ずさび」から「言ひすさぶ」までは口頭の音声表現、「謡ひすさぶ」から「弾きすさぶ」までは演奏、「手すさび」から「書きすさぶ」までは物に文字や絵を書き付ける書記行為である。知られるように、先行後追の物語や日記でも比較的よく用いられているのは、和歌や漢詩を口ずさむ口頭表現と古歌や自作の和歌を書き付ける書記行為だが、「すさび」「心のすさび」「すさびごと」「すさびわざ」などの名詞は源氏物語で際立っていて総数の三分の一以上を占めている。ところが、多用されている狭衣物語でも八分の一ほどにすぎない。しかも、音声表現や書記行為にしても、源氏物語の用い方は他作品とはちがって独自ののである。

### 三 和歌表現「すさめぬ」

前章で金葉集までの勅撰集にはもっぱら下二段活用の他動詞「すさむ」が認められると述べたが、それは古今六帖や紫式部と同時代の歌人までの私家集でも同じである。元慶六年(八八二)の竟宴和歌に、

とつゑ余りやつゑを越ゆるたつの君駒すさめぬば(須佐米然婆)老い果てぬべし  
(日本紀竟宴和歌)

と、「須佐米然婆」と表記されているから、すくなくとも九世紀末には和歌に下二段活用の「すさむ」が用いられていたと考えられる。しかも、「すさむ」は、もっぱらAがBを「すさめぬ」「すさめず」と否定する形で詠まれている。

①山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ

(古今・春上・五〇)

②大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし

(古今・雑上・八九二)

③谷寒いまだ巢立たぬ鶯の鳴く声若み人のすさめぬ(後撰春上三四)

④これを見よ人もすさめぬ恋すとて音を鳴く虫のなれる姿を  
(後撰・恋三・七九三・源重光)

⑤年経れど人もすさめぬ我が恋や朽ち木の柚の谷のむもれ木  
(金葉・恋上・三八三・藤原顕輔)

古今集の①は山の高みに咲いているから誰も進んで見に行つて賞美しない桜花よ、ひどく悲しむなよ、私が行つて引き立てよう、美しいと賞めてあげると詠み、②では大荒木の森の下草は老い枯れてしまったので、馬も進んで食べようとしなないし、飼葉として刈り取る者もないと詠んで、老いた我が身を下草に喩え、誰も恋の相手にしてくれないと嘆いている。後撰集の③では鶯の鳴く声を人が心のままに賞めない、まだ寒さが厳しいので鶯が巢立たず、鳴き声が未熟だからだといひ、拾遺集の④は、気まぐれにも受け容れてくれない恋をあなたにしたので、声を上げて鳴いていた蝉がこのように抜け殻となつてしまいました、これが私ですと「蝉の殻」を添えて訴えている。そして金葉集の⑤では、「人もすさめぬ我が恋や」と、対象が動植物から恋のような抽象物へと拡張している。①は猿丸集や古今六帖にも形を変えて認められるから、早くに、駒や人が、桜やあやめ、菅などを「すさめ」ないと詠む「すさむ」歌の形が出来ていると知られ、②の影響からか、駒が「すさめぬ」と詠むものが多い。そのためか、二例認められる作中和歌でも、

⑥今さらにかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を

(蜻蛉日記、下三四一)

⑦その駒もすさめぬ草と名に立てる汀のあやめ今日や引きつる

(源氏物語、蛩二〇九)

⑥の蜻蛉日記では道綱母、⑦の源氏物語では花散里が自身を、「駒」が「すさめぬ草」と詠んで、女盛りを過ぎた私などに言い寄る人などいな

い、暗に兼家や源氏が関心を抱かないとほのめかしたり、卑下したりしている。

散文部分でも、三例のうち二例が「すさめぬ」で、

⑧「いさや、なほすさめぬ事なり。今か的一条、西の対の君は尋ねはべらむ」と聞こえたまふ。(うつつほ物語、楼上上四〇八)

⑨をかしかりつる人のさまかな。女御の御妹たちにこそはあらめ。まだ世に馴れぬは五六の君ならむかし、帥宮の北の方、頭中將のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか、なかなかそれならましかば今少しをかしからまし、六は春宮に奉らむと心ざしたまへるを、

(源氏物語、花宴三五八)

⑧のうつつほ物語では仲忠が、父兼雅に前齋宮との逢瀬をそそかされて、「すさめぬ事」ですと断っているし、⑨の源氏物語では、源氏が、弘徽澁の細殿で出会って契った人を、右大臣家のどの姫君なのかと思いめぐらすなかで、四の君を「頭中將のすさめぬ四の君」、正妻だが、頭中將が気に入っていない人と考えている。いずれも男がいま一つ恋情が持てない女君を「すさめぬ」と言い表す、まれな表現で、これらは和歌表現を散文で用いた、一種の引歌のようなものと考えられないか。

ところが、否定の形をとらない「すさむ」が源氏物語に認められる。

⑩「若君の、一夜宿直して、まかり出でたりし匂ひのいとをかしかりしを、人はなほと思ひしを、宮のいとと思ほし寄りて、兵部卿宮に近づききこえにけり、むべ我をばすさめたりと、気色取り、怨じたまへりしこそをかしかりしか。」(源氏物語、紅梅五三二)

これは真木柱のことばで、夫の紅梅大納言に、宿直明けの我が子大夫君から発する芳香を、春宮が、匂宮の移り香とお気づきになって、「我をばすさめたり」とお恨みになったと話している。もちろん春宮の冗談なのだが、「怨じたまへりし」だから、この「すさむ」を好意を持つ意と

は取れない。しかし、それでは「すさむ」が①から⑨の否定形の「すさめぬ」と同義となってしまう。そのため、木之下正雄氏は矛盾をなくそうと、『平安女流文学のことば』(至文堂一九七〇年一月)で、「スサムは本気で愛するのではなく、気まぐれに弄び物にする」意だから、「すさめぬ」は「弄び物程度の最低の愛情さえないという」言い方、「すさむ」は「以前の本気の愛情がなくなって最低の愛情に冷却してしまったという」言い方だと説かれている。「すさぶ」とも意義を繋げた魅力的な説だが、和歌は強調して表現しがちだから、⑥にそうした皮肉の意味合いも込められていると考えられはしても、他の例はどうであろうか。そこまでの強い言い方ではないように思われる。ただ、⑩の「すさめたり」は、春宮が、大夫君にとつては匂宮こそ本命で、私を気まぐれに好んだのだな、浮気だったのだな、と怨んで見せたと取るとおもしろい。注目すべきは、一世紀ほど後に成立した栄花物語続編に、⑩の否定形と考えられる「すさむ」が認められることである。

⑪内裏の御心いとをかしうなよびかにおはしまし、人をすさめさせたまはず、めでたくおはします。(栄花物語、卷三六根合、三七四)ここでは後冷泉天皇の人となり、人を「すさめ」ないと褒めているから、この「すさむ」は⑩と同じく、嫌う、遠ざける意となろう。つまり、時が経過すると、人間の行為をいう下二段の「すさむ」も、自然の勢いをいう四段の「すさぶ」のように、人間の行為でも、好む方向と好まなくなる方向を共に担うようになったのだろうか。

下二段活用他動詞「すさむ」は平安和歌では「すさめぬ」の形で、男に顧みられない女の喩として定着していったらしく、それが散文中に和歌的な表現として取り入れられたとおぼしい。心の赴くままに相手に対する意を、心が好む方向に進んでいく勢いとして捉える場合と、心のままに行うことを野放図でよくない行為、気まぐれな行為と非難して捉

える場合とでは、解釈が異なり、単純な訳では意味が相反するとも取られよう。語義が相反するように思われるのは、場面や文脈の捉え方の相違にすぎないのではないか。

#### 四 「すさぶ」と「あそぶ」

人間を主体とする「すさぶ」が心の状態を核とする語であるなら、同じく、「心ばかりは遣りて遊びなどはしたまへ」（権本一八七）など、心の状態を核とする「あそぶ」とは、どのような相違があるのだろうか。

犬塚旦氏は「あそぶの古義」（『王朝美的語詞の研究』笠間書院、一九七三年九月）で、それまで管絃の意と考えられてきた「あそぶ」が上代では狩猟や遊行宴飲にも用いられていると指摘され、「あそぶ」は心をなぐさめ楽しむ意だと説かれた。たしかに、平安の仮名文でも、「あそび」「あそぶ」は、管絃舞樂、催馬樂今様などの音楽、鷹狩りや競射、蹴鞠競馬などのスポーツ、碁、双六、韻塞などのゲーム、歌合、根合などの合わせ物、逍遙、そして幼児や水鳥などの行為に用いられているから、生存に関わりのない行為や心身を解き放つ楽しい行為をする意と考えられる。しかも、興味深いことに、音楽に用いられるといっても、音楽記述すべてが「あそぶ」と記されているわけではない。「あそぶ」は、専門の樂人が行う儀式や行事の管絃舞樂には認められない。男女の交情や孤愁の独り琴にも認められない。儀式や行事の後、貴顕がみずから樂器を手にとって演奏し催馬樂を謡って楽しんで、仲間が集まって個人的に楽しく合奏する時にだけ認められるのである。<sup>（注5）</sup> その一方、絵を描くことや文を書くことを「あそぶ」とはいわれない。「すさぶ」という。子どもの行為や水鳥が泳ぐ姿は無心とみなされるからか、「あそぶ」というが、「すさぶ」とはいわれない。碁や双六の遊戯は「あそび」とも「すさび」ともいわれる。音楽演奏も同じで両語が認められる。

「あそぶ」は「琴の音のあるかぎり掻き立てて遊ぶに」（うつほ物語、俊蔭二九）「とりどりに物の音ども調べ合はせて遊びたまふ、いとおもしろし。」（源氏物語、花宴三六二）のように、接続助詞などを挟んで演奏を捉え返し、それが楽しいというのであって、演奏動詞には直接しない。曲名には「安名尊遊びたまふほど、生けるかひあり」（源氏物語、胡蝶一六九）のように直接する。一方、「すさぶ」は、曲名には直接しないが、「謡ひすさぶ」三例「吹きすさぶ」二例「弾きすさぶ」一例「弾きすさむ」一例と、演奏動詞に直接する。

①あづまの調べをすが掻きて、「玉藻はな刈りそ」と謡ひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。

（真木柱三九二）

①は玉鬘を髭黒に取られ、あまつさえ自邸に移されてしまった源氏が、春雨の頃、思い出の対に赴き、玉鬘を偲んで和琴をすが掻いて風俗歌「鴛鴦」を謡うところである。ここで源氏は玉鬘の爪音とともに、その日その時の顔つき、物言い、肢体などをありありと思ひ起こし、大切な人は奪われてしまった、もうあの日々が帰ってくることはないと思ひむ。この「すさぶ」を『新編』は「謡い興じる」、『集成』は「興にまかせてお話しになる」と解しているが、ここはしんみりするなかに半ばやけの気分が底流しているから、きちんとした演奏と謡ではなく、投げやりな調子で弾き謡っていると解するべきではないか。

②といのは、源氏物語で演奏を「すさぶ」という時は、心内に抱えるものがある場合だからである。

②つれなう今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞きすぐしたまはで、高麗笛取り出でたまへり。

（末摘花二七三）

③つくづくと臥したるにも、やる方なき心地すれば、例の慰めには、

西の対にぞ渡りたまふ。しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき、あざれたる桂姿にて、笛をなつかしう吹きすさびつつ、のぞきたまへれば、女君、ありつる花の露に濡れたる心地して添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。  
(紅葉賀三三二)

④ 掻き合はせなど弾きすさびたまひて、押しやりたまひつ。

(少女三六)

②は末摘花の邸で鉢合わせた源氏と頭中将が予定を変更し、姫君に想いを馳せながら「笛を吹き合せ」て左大臣邸に着いたところで、夜歩きを隠して装束を改め、今来たばかりというふりをして、「吹きすさ」んでいる。二人がわざとらしく存在を誇示して気ままに吹いているのは、心に先ほどの姫君の楽の音を抱いているからで、それゆえに生き生きとしており、左大臣の耳に響いて、高麗笛を持ち出させたのだろう。③は同じく源氏の笛だが、不義の子が誕生していつそうとりつく島もなくなつた藤壺の対応に傷つき、鬱屈を深めて、その慰めに若紫に会おうと西の対に向かうところで、寝乱れたままの鬢の毛、すこし着崩れた桂など、魅力こぼれるうちとけ姿で、演奏もそれにふさわしく、我が心をそのまま載せて「吹きすさび」「吹きすさび」する、藤壺への諦められない、それ故に鬱屈した想いと、紫のゆかりで可愛い盛りの姫君への期待がない交ぜになっており、そんな楽の音だからこそ、訪れを知らせているだけなのに、内心の気分が若紫に看取され、「入りぬる磯の」と口ずさむ、これまでになく大人びた対応を一瞬にしる取らせたのである。

④では雲居雁が大宮と頭中将の見守るなか、箏の「掻き合はせ」を「弾きすさ」んでいる。「掻き合はせ」は調子を整えるために演奏する曲だから、通常はさつと流すように弾く。濤標巻の「掻き合はせすさびたまひて」もそうした例である。

このように、「すさぶ」は、楽曲や謡を正格な奏法や謡い方に則って

謡ったり演奏したりするのではなく、軽く流すように演奏することで、それが見方によつては、心の赴くままに逸脱する演奏となったり、心が何かにとらわれて投げやりな演奏になったりもする。

「あそぶ」は「吹き合はせて遊ぶ」「掻き合はせて遊ぶ」「弾き合はせて遊ぶ」と合奏が多く、碁や双六競射が規則に則っているように、一定の規矩を内包している。それに比して「すさぶ」は単独で、ややもすれば、心の赴くままの野放図な演奏となりかねない。一方、「あそぶ」は音楽と真剣に向き合い、その世界に心身を解放して楽しむ。「あそぶ」は音楽の方に主点があり、「すさぶ」は演奏者の想いに主点があつて、源氏物語はそこに鬱屈する想いなどを盛り込んだとおぼしい。

したがって、「あそぶ」か「すさぶ」かで物語の主題が変わってくる。⑤また、この男、逍遙しにとてなま田舎へいにけるに、はるかに鶯の鳴きければ、「いづ方ぞ」など、供なる人に、

うぐいすの声のはつかに聞こゆるはいづれの山になく山彦ぞ

とぞ口遊びにいひける。

(平中物語、六段四六五)

郊外に逍遙に出かけた男が、遠くで鳴く鶯の声を聞いて、供人に「いづ方ぞ」と尋ね、和歌をつぶやいているのだが、それを「口遊び」といつている。どうして「口ずさび」ではないのだろうか。「遊び」という以上、その行為には楽しさが含まれていなければならない。その鍵は和歌にある。この和歌は地の文の「はるかに鶯の鳴きければ」という情景を上句にし、「いづ方ぞ」という問いかけを下句にしている。これだけでは出来事をそのまま和歌にただけである。しかし、男は、さらに鶯の鳴き声を「山彦」と捉え、「鳴く」を「泣く」と掛けて自身の泣き声のこだまとし、恋の愁いを詠み込んでいる。「口ずさび」であれば、男のどうにもならぬ情況が投げ出すように呈示されて終わる。しかし、「口遊び」で終わる語り方はなになし明るく、救いがある。「口遊び」



からは、問いをうまく和歌に仕立てた即興性と、その状況を利用して報われぬ恋の春愁を詠み込んだ機知、男の独り笑みが浮かび上がってくる。

平中物語には「口ずさび」が認められないから、この「口遊び」は「口ずさみ」と交替可能と考えられなくもない。しかし、「遊び」という以上、そこには楽しさ晴れやかさが自ずと伴っている。「口遊び」は即興の詠歌に満足し、自らの憂愁を鶯の音に重ねることで、自然に溶け込んで癒された男の気分を語っているのである。憂愁か慰撫か、同じく心の解放であっても、「あそぶ」は節度を持った楽しい行為で明るいイメージを、「すさぶ」は矩を外しかねない危うさを内包して、歓迎されないイメージを描出しているのである。

## 五 「言ひすさぶ」

音声による口頭表現の「すさぶ」には「口ずさぶ」と「言ひすさぶ」の二系列が認められる。なぜ、二系列も用いられているのだろうか。どんな差異があるのだろうか。

「言ひすさぶ」はまず歌物語に認められる。

①「あやしきことかな。誰と聞こゆる人の、かかることはしたまふぞ」  
など言ひすさびて入りぬ。(大和物語一七一—四一四)

②また、この同じ男、この二年ばかりもの言ひすさぶる人ぞありける。  
(平中物語四段四六三)

③この男、いひすさびけるに、七月になりにつけり。

(平中物語一—三四—七七)

④集まりて、言ひすさびて、夜明けにければ、帰りにけり。

(平中物語二—九段—五—一〇)

⑤また、この男、言ひみ言はずみ、もの言ひすさぶる人ありけり。

(平中物語三—二段—五—一三)

①は式部卿の女房大和が、実頼の久しい途絶えに左衛門陣を訪ねていき、通りかかる人に取り次ぎを頼むところで、最初の人はどうしてこんなことをするのだと「言ひすさびて」入ってしまう。『新編』では「気ままに、相手の話を聞いてやるという意図もなく、その場で思い付いた言葉を言い捨てる。」と注している。②は平中が二年間恋文を贈っている人がいるといい、③はある女に言い寄っていたところ、七月になってしまったといい、④では恋文を出したり出さなかったりの言い寄る女がいたという。④はすこし異なる。平中と女が意気投合したところに、他の女たちが寄ってきて、あれこれと「言ひすさびて」夜明けまでいたというのが、「言ひすさび」たのは平中なのか、女たちと平中なのか。

上二段活用の「言ひすさぶ」は、四段活用の「口ずさぶ」とは違って、対象を必要とする。①は通りかかる人が大和に、②③⑤は平中が女に、「言ひすさび」ている。したがって、④も複数の者の座談ではなく、平中が女たちにいろいろ話すと考えた方がいい。また、②は「いかで、なほ対面せむといふ心ぞせちにありける」というのだから、二年の長きにわたって熱心への意、③も同じだが、⑤は「言ひみ言はずみ」だから気まぐれな行動と考えられる。「言ひすさぶ」もやはり、文脈によつて解釈が変わってくるようだ。

源氏物語ではもう少し複雑である。

⑥夜もいたく更けゆくに、風のけはひ烈しくて、まことにいともの心細くおぼゆれば、さまよきほどにおし拭ひたまひて、

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらきに添へてつらけれ

心づからの」とのたまひすさぶるを、「げに、かたはらいたし」と人々、例の、聞こゆ。(朝顔四八六)

⑥は源氏が朝顔姫君に求愛するところだが、いくら真剣に訴えても、せめて「憎し」とだけでも直接にお言葉をと願っても、姫君の心は動かず、



それでいて、人伝ての返事はなさるのだから、源氏は諦めきれない、かといって成算はないという、生殺しにあつたような気分、恨みかけずにはいられない。それが「つれなさを」の歌である。昔からあなたはつれなかつた、それでも私は懲りずに貴方を思ってきたのだが、今日のお仕打ちにあつて、ここまでされてもまだ懲りない私の心に気づきました。それほど私はあなたを愛しているのです。だから、あなたの薄情さに加えて我が心がいつそうつらく思われます。それも中務の「恋しきも心づからのわざなれば置き所なくもぞ煩ふ」のように、私のせいなのです、それはわかっているのですが、わたしにはこの心をどうしようもありません、と働きかける。この泣き落としに反応したのは女房たちで、「げに、かたはらいたし」と姫君に取りなす。しかし、姫君の意志は固く、「あらためて何かは見えむ人の上にかかりと聞きし心がはりを」と、心変わりも世間ではあるようですが、私には昔と違った事などでできませんときっぱり拒否している。

⑦ 「よそにてはもぎ木なりとや定むらん下にはほへる梅の初花

さらば袖触れて見たまへ」など言ひすさぶに、「まことは色よりも」と、  
(竹河六九)

⑦は「まめ人」で色めかしくないと評判を取っている薫が「好き者ならはむかし」と年賀に玉鬘邸を訪れて、女房に「すこし色めけ梅の初花」、白梅さん、紅梅になって、もうすこしうちとけて、相手して下さいよと言いかけられた時の返歌である。薫は、あなた方は私を物慣れない白梅と思っているようですが、実は心の底は紅梅で色も香も備わっています、直接触れて確かめてくださいよ、と「言ひすさび」ている。ここを『新編』は「戯れ半分に言う」と訳しているが、これは薫がからかいに対して冗談めかして抗議しているのである。残る二例も同様である。八の宮は薫に亡き後の姫君の後見を託した後、薫の懇望もあつて、姫君たちに

箏を演奏するよう要請するが肯んじない。八宮が「たびたびそのかしきこえたまへど、とかく聞こえすさびてやみたまひぬれば、いと口惜しうおぼゆ。」(橋姫一五八)と、繰り返し宮が勧めても、何やかやと理由を申しあげてうやむやにしてしまう。姫君たちは琴の音を聴かれただけでも恥ずかしいのに、正式にお聞かせするなんてとんでもないと思つたからで、それを薫はまことに残念と思つている。また、浮舟のすげない態度を恨めしく思つて帰りにかかる中将は、引き止めようとする妹尼に「をちなる里」、浮舟が冷淡だとよくわかつたと「言ひすさみて」とりあわずに帰ろうとしている。これも自分の気持ち容れられず、報われぬ想いの中將の、いわば捨て台詞である。つまり、源氏物語の四例は状況の相違はあつても、相手に反論し、抗議していると言えよう。

これが源氏物語に認められる「言ひすさぶ」の特徴である。大和物語も女房を非難だけして無視している。平中物語も、「言ふ」ではなく「言ひすさぶ」だから、単に恋を訴えるのではなく、相手を動かそうと自分の想いを言い募っているのである。

つまり、「言ひすさぶ」は従来説かれてきた気まぐれに話したり、熱心に話す意ではなく、相手に対して働きかけること、自分の想いを主張する意であつて、自らの裡に閉塞する「口ずさぶ」とは異なっている。そして、「すさぶ」の性格上、見方によって解釈も変わる。大和物語では言い捨てるが適切だが、源氏物語では、自分の想いが受け入れられないと見て抗議する意で用いられているから、言い募るが適切なのである。

#### 六 「すさび」―源氏物語独自の表現―

源氏物語では、先行の作品に比して「すさぶ」語彙が突出して多く認められる。しかも「すさぶ」は相反する解釈を引き起こすことが少なくない。「すさぶ」の多用は物語にとつてどんな役割を担っているのか、

それを考えるために、これまで「すさぶ」の語義用法について考察してきた。

平安仮名文の「すさぶ」はもっぱら人間を主体として用いられ、心の赴くままに行うことをいうのだが、そのイメージは見方によって変貌する。ややもすれば逸脱する点からは、気ままで投げやりな行為、戯れの行為と見え、自己の欲求を貫こうとする点では、熱意のある行為と評価されたり、逆にわがままな行為と見えたりする。また、心に任せて進むことに重点を置けば加速する方向にも収束に近づく方向にも用いられる。そのためか、同じく精神の解放をいう「あそぶ」が、日常から離れて楽しく過ごす行為で、協同して行う場合も多いため節度をもって行う、社会的な行為でもあるのは異なり、「すさぶ」は日常に留まり、そのなかで精神を解放するために、個人的で、他者を意識せず配慮を欠く事態も生じて、一種歓迎されないイメージを帯びている。

そうした「すさぶ」語彙のうち、他者を要するのは、下二段活用の「すさむ」と四段活用の「言ひすさぶ」で、「すさむ」は「すさめぬ」と否定の形で和歌表現として定着しており、「言ひすさぶ」は「口ずさぶ」とは違って、相手に働きかけて自らの立場を伝えようとする語で、源氏物語では相手に抗議する際に認められる。

源氏物語の独自性をもつとも顕著に現れているのは名詞である。どんなことを「すさび」といつているかをみると、「すさび」二三例は戯れの恋二一例・絵や物語の享受一例・芸事一例で、「すさびごと」九例は戯れの恋人例・物語の享受一例、「すさびわざ」二例は鼻に朱を塗るいたずらと詩作韻塞が一例ずつとなつて、実に二九例が戯れの恋なのである。「すさび」の大多数は男の出来心での女性との交渉、浮気である。では女君は、というと、女君の「すさび」は古歌や物語の享受で、男君とはまったくちがう。源氏物語では男の「すさび」は戯れの恋、女の「す

さび」は古歌や物語と、ジェンダーバイアスがかかっているのである。

しかも、男の「すさび」は、源氏一九例、匂宮二例、左馬頭・頭中将・蛭宮・冷泉帝各一例、男性一般四例と、光源氏に集中していて、当人がこの恋は「すさび」で終わりそうにないと予感したり、「あまりけしからぬすさび」と反省したり、紫上から「すさびにても心を分けたまひけむよ」と怨まれたり、語り手から懲りない「御心のすさび」と揶揄されたりしている。源氏物語では「すさぶ」語彙のなかでも名詞の比率が高く、こうした戯れの恋の「すさび」を通して人と人との関係、光源氏の折々の生とその軌跡を語っている。また、「口ずさぶ」「書きすさぶ」の心のままに口ずさみ、和歌を書く行為も、先行後追の物語とは異なつて、人と人の関係を浮き彫りにしていく方法となつている。これらを詳しく辿っていききたいのだが、既に紙幅が尽きた。次稿では、こうした「すさび」と「癖」の問題、一見すると他の物語と変わらないように思われる、口頭表現の「口ずさむ」や書記表現の「書きすさぶ」を取り上げて、源氏物語の方法について考究していきたい。

#### 注

〈1〉八代集・古今六帖は『新編国歌大観』、そのほかは特に断らない限り『新編日本古典文学全集』を用いた。表記をわたくしに変えているところがある。引用の( )内には、和歌には部立・歌番号・詠者を、散文には巻・頁などを記している。

〈2〉根来司氏「中古和歌の語彙」(『講座日本語の語彙2』明治書院、一九八二年五月)

〈3〉山口明徳氏は「『降りすさむ』『吹きすさむ』について」(『中世国語における文語の研究』明治書院、一九七六年八月)で、これらを「時折吹く」意と解され、中世の注釈で「吹き止む」と考えられたのは「す

さむ」が和歌に使われなくなったため、「荒」との連想が強く働いて、「荒れる」か「止む」の一語で表せる動詞に置き換えたためではないかと説かれている。

へ4 へ「すさび」に「すさみ」(金葉1)、「手すさび」に「手すさみ」(金葉1・狭衣1)、「すさびごと」に「すさび言」(源氏3)、「すさぶ」に「すさぶ上二段」(源氏2)・「うちすさぶ」(寢覚1)・「好きすさぶ」(寢覚1)、「口ずさび」には「口ずさみ」(源氏4、狭衣2)、「口ずさぶ」に「口すさぶ」(源氏3)・「うち口すさぶ」(源氏1)、「言ひすさぶ」に上二段活用(平中2)・「言ひすさむ」(源氏1)・「聞こえすさぶ」(源氏1)・「のたまひすさぶ」(源氏1)、「吹きすさぶ」に「吹きすさむ」(狭衣1)、「弾きすさぶ」に「弾きすさむ」(源氏1、狭衣1)、「書きすさぶ」に「書きすさむ」(源氏1、狭衣2)・「書きすさびる」(源氏1)を含めている。

へ5 拙論「あそび」「あそぶ」考(『国語語彙史の研究八』和泉書院、一九八七年一月)、『源氏物語と音楽』(和泉書院一九九三年十二月)